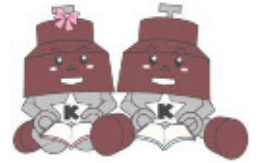




川口市立図書館

図書館だより



168号 2021.3



↑スマートフォン用 QRコード

パソコン用ホームページ URL — <https://www.kawaguchi-lib.jp/>
 スマートフォン用ホームページ URL — <https://www.kawaguchi-lib.jp/opac/s/>
 携帯電話用ホームページ URL — <https://www.kawaguchi-lib.jp/opac/k/>
 公式ツイッターアカウント — @kawaguchi_lib



携帯用 QRコード ↑

わたしの今年の一冊 2020

昨年お読みになった本の中で、印象に残った一冊を紹介していただく「わたしの今年の一冊」は、今回で25回目となりました。たくさんのご応募をいただきましたが、紙面の関係で26点掲載させていただきます。

「在野研究ビギナーズ」 荒木優太／編著 明石書店 2019年刊 002/A

大学に所属せず独自に、様々な分野で研究を続ける15人の在野研究者による経験談と実践方法がまとめられている。

大学を卒業したけれど学んだことをもう少し深めたいという人のみならず、今年こそ何か新しいことを始めようと思っている人にも、本書は良いエンジンとなるように思う。成果に拘泥せず、研究という過程こそを楽しもうという彼女ら/彼らの姿勢から、何かテーマを決めて自分なりに調査し書いてみようという意気込みが湧いてくる。(20代)

「灯台からの響き」 宮本輝／著 集英社 2020年刊 913.6/M

コロナ禍で、遠出はもちろん、近場への外出もままならない今年。

灯台を巡るこの小説は、旅行気分も味わえてとてもよかった。妻を突然亡くし、すべてにやる気をなくしていた夫は、ある日、本にはさまれていた妻宛の古い絵ハガキを見つける。見覚えのない灯台の絵と文面から、夫は自分の知らない若い時代の妻の謎を解き明かそうと動き始める。コロナが収まったら、あちこち灯台を訪ね歩きたいと思う。(60代)

「穂高小屋番レスキュー日記」 宮田八郎／著 山と溪谷社 2019年刊 786.1/M

北アルプス奥穂高岳山頂直下に建つ穂高岳山荘の元支配人で2018年事故で亡くなった宮田八郎さんが著された本です。山岳レスキューの最前線を軽妙な語り口で、重すぎず、でも、心に刺さる言葉で綴った作品です。山に登ることが好きな者にとって最も大きな問いであろう「何故山に登るのか」について一つの答えを示してくれた一冊でした。(30代)

「クスノキの番人」 東野圭吾／著 実業之日本社 2020年刊 913.6/T

東野さんの作品はミステリーを中心に読んでいました。こちらは、主人公の成長をえがいた作品です。クスノキをたずねてくる人々と千舟さんの思いにふれていって、玲斗が少しずつ変わっていく。そして立派なクスノキの番人になっていくお話は、私もいっしょに見守っている感じがしました。私だったら、何を念じるかな。ちょっとこわい気もします。(40代)

「風の市兵衛」シリーズ 辻堂魁／著 祥伝社 2010年刊ほか B 913.6/T

今年一番楽しんだ本は、辻堂魁著「風の市兵衛」シリーズです。もともと時代小説は好きですが、この本の書評にもあるように、江戸情緒、人の情があふれるものです。読んで、ほろっとしつつ楽しんでいます。特にこのシリーズは事件の舞台が諸国にわたるので、都度表紙の裏地図で確認しながら、一緒に旅をする気分を味わっています。細かいところでは、居酒屋で酒席のつまみ等が具体的で、自分も食べたいと思います。最近川口のイベントで『深川めし』を食しましたが、江戸の香りを感じました。最後に市兵衛が事件を解決することで、困っていた人が助かり、ほっと一息を入れます。コロナ禍で自宅時間がありあまり、今シリーズ24を読了したところです。(70代)

「谷中びんづめカフェ竹善」 竹岡葉月／著
集英社 2019 年刊 B 913.6/タ

びんづめという言葉に興味を惹かれ、手に取った。読んでみると、ジャムをはじめ、長期保存できるものは全てそうらしい。コミュ障女子大生が大量の野菜をゴミに出し、カフェの店主に咎められるところから物語は始まるが…。料理小説だけに留まらず、彼の義理の息子の不登校を通して、子供の心の闇にまで踏み込んだところが良かった。(年代不詳)

「里山物語」 今森光彦／著
新潮社 1995 年刊 748/イ

滋賀、大津柳木地区里山写真集。著者は 30 年以上かけて里山をつくり、住んでいる。昨今少なくなっている里山。自然の美しさ、厳しさが感じられ心豊かに！不安な今世相。出逢えてよかった。(70 代)

「とめどなく囁く」 桐野夏生／著
幻冬舎 2019 年刊 913.6/キ

釣りに出た夫が行方不明になり、資産家の男性と再婚した主人公。海辺の豪邸での暮らしの描写に、羨ましいな～と思いつつ、元姑が次第に常軌を逸していく様子や、荒んだ本性を現していく元夫の友人たちの不気味さにドキドキし、失踪の真相が気になって最後まで一気に読みました。(40 代)

「カザアナ」 森絵都／著
朝日新聞出版 2019 年刊 913.6/モ

オリンピック後の近未来の日本が舞台。デジタル化、監視化が進んで、便利だが窮屈な社会。そんな中に、空や石や虫や鳥など自然の力と繋がっているカザアナといわれる者たちがあらわれて、希望への抜け道を走りぬける。コミカルな場面もある軽快な物語だが、社会の閉塞感という点では今の世の中に似ているものを感じた。(50 代)

「おいしくて泣くとき」 森沢明夫／著
角川春樹事務所 2020 年刊 913.6/モ

今の子ども食堂の話と過去の子ども食堂の話が貧困、いじめ、虐待などの問題を読者の胸につき差しながら進んでいく。そして、今と過去の物語が重なった時、大きな感動と、驚きを呼び、思わず涙がこぼれた。(40 代)

「戦下のレシピ」 斎藤美奈子／著
岩波書店 2002 年刊 383.8/サ

日中戦争時から太平洋戦争敗戦時まで、国民はどのような物を食べていたのかを詳細に記した近現代史の本。今はおいしい食べ物を食べられて幸せだ。(60 代)

「ライオンのおやつ」 小川糸／著
ポプラ社 2019 年刊 913.6/オ

自分の最期のあり方を考えさせられる小説です。誰にもめいわくをかけずにホスピスで過ごす。そのホスピスが食事がおいしくて、おやつの時間がまたステキなんです。ひとりだと思っていたけれど、誰かとつながっていたんだと思わせてくれる最期です。(60 代)

「神さまの貨物」 ジャン=クロード・グランペール／著
河野万里子／訳
ポプラ社 2020 年刊 953.7/グ

まるで童話のように始まりますが、ホロコーストのお話なのです。登場人物の一人が「…この世ではいかなる者も、何かを失うことを受け入れねば、何も得ることはできない。…」と語るくだりがありますが、これらの言葉に癒され、励まされる方も多いのではないのでしょうか。私たちはコロナを含め様々な問題に悩まされていますが、愛をもって解決への努力をしなければと考えさせられました。短くて読みやすいので、絶対オススメです！(60 代)

「モモ」 ミヒヤエル・エンデ／作
大島かおり／訳
岩波書店 1986 年刊ほか K 943/エ

物が豊富にあり便利な世の中になったにもかかわらず、「生きにくさ」を感じる人々は少なくないと思います。便利で豊かな暮らしと引きかえに私たちが失ったもの—その答えがこの本を読むことで実感できると信じています。(50 代)

「海辺の宝もの」 ヘレン・ブッシュ／著
鳥見真生／訳 佐竹美保／画
あすなろ書房 2012 年刊 K 289/ア

主人公のメアリーが最初は仲が悪かった町の子どもたちに、お父さんの言っていたことを思い出して声をかけ、仲が良くなって、良かったです。また、まだ若い女性が地質学や古生物学をすすめたのを知って、とてもおどろきました。(10 代)

「紙屋ふじさき記念館」 ほしおさなえ／著
KADOKAWA 2020年刊 B 913.6/ホ
”紙はむかしから強い力を宿すもの
だった”というメッセージが物語の
中心にある。主人公が紙小物や和
紙の魅力を理解するのと同じよう
に、やさしい文章で読者にも話して
聞かせているように感じた。著者の
「活版印刷三日月堂」シリーズで
は、川越を舞台としていたが、今回は日本橋や美
濃市の街を歩いてみたいと思わせてくれた。(60代)

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」
ブレイディみかこ／著
新潮社 2019年刊 376.3/ブ
イギリスの名門小学校から元底辺中学校に進学し
た息子と中学校の友人たちの青春
を描く。階級、人種、宗教が異なる
人々が暮らすイギリス。凝り固まっ
た大人に対し、彼らは無邪気に鋭
い指摘をする。ブレグジットが起き
たイギリスの社会構造を描いた涙
あり、笑いありの一冊。(20代)

「ひとり旅日和」 秋川滝美／著
KADOKAWA 2019年刊 913.6/ア
一人旅ってしたことありますか？日
帰りでも泊まりでも行ったことのない
土地へ一人で行くのはドキドキする
ものです。でも行ってしまえば一人
旅ならではの視点で行きたい所、食
べたい物など思う存分楽しめます。
行った所、行ってない所、ドキドキし
ながら読んで下さい。(50代)

「くまのパディントン」 マイケル・ボンド／作
福音館書店ほか 1967年刊ほか K 933/ホ
パディントンは、どこかに行くときとわざとではないのに
何か事件がおきます。でも、かならずその事件がか
いけつするのですかっと思します。わたしもパディント
ンのようなくまがほしいです。(10代)

「はけんねこ」 中原一也／著
二見書房 2019年刊 B 913.6/ナ
おめでとう、貴方は猫に選ばれました！！愛を持っ
てしっかりお世話して下さいねー
という事らしい。野良では生き辛
い猫を猫好きの人に飼ってもらえ
る様奮闘する猫達の姿が描かれ
ています。笑いあり涙あり猫好き
にはたまらない一冊です。猫がお
好きでない方もたまされたと思っ
て読んでみて！！(20代)

「水を縫う」 寺地はるな／著
集英社 2020年刊 913.6/テ
男の子なのに刺繍が趣味。女の子が
石を拾いそれを磨く。一途に好きな事
に熱中できる。好きのエネルギーがあ
ればジェンダーも関係ない。(70代)

「ひみつのしつもん」 岸本佐知子／著
筑摩書房 2019年刊 914.6/キ
翻訳が本業！？の方が、エッセイを心待ちしてい
る位、ツボにはまるとクセになる。筆者は不治の病
に罹っている。「カードの磁気が必ず弱い病」や「普
通に触っただけなのにパソコンが
フリーズする病」も併発している。
圧巻は「靴下のかかどがいつの間
にか甲のほうにまわってしまう病」
だ。忘れていたヘソクリを見つけ
たような気分になれます。(60代)

「アーモンド」 ソンウォンピョン／著
矢島暁子／訳
祥伝社 2019年刊 929.13/ソ
2020年度翻訳部門で本屋大賞をと
った作品。扁桃腺がうまく機能しない
「失感情症」の少年の成長物語。何
度も挫折をくり返しながらか、最後に放
つ言葉「人は生きていくようにできて
いるんだから」に心打たれた。(70代)

「あめつちのうた」 朝倉宏景／著
講談社 2020年刊 913.6/ア
甲子園球場を整備する阪神園芸の
新人グラウンドキーパーの成長物
語。「雨が降るからこそ、地面は固
まる」という主人公の先輩の言葉は
心に染みる。人だって同じ、失敗や
ピンチを乗り越えて、より一層強くな
れる。読後、清々しい気持ちになり
ました。(50代)

「疫病と世界史」 W・H・マクニール／著
佐々木昭夫／訳
新潮社 1985年刊 493/マ
コロナ禍にさらされている私達にとって、人類はどの
ように疫病と共存(?)してきたかがよく分かりまし
た。正しくコロナを恐れることが大切と思いました。
私の中では今年の一冊(ベスト1)です。(年代不詳)

「須賀敦子のトリエステと記憶の町」
岡本太郎／文写真
河出書房新社 2002年刊 910.26/ス
今、現在、コロナの時世、ニュースは
息のつまる話ばかりです。が、須賀
さんのご本、文、ことばは自然体で
ゆったり優しく響きます。今、せわし
ない私の心に。(60代)

このほか、

- 「世界を変えた人が、子どもだったころのお話」PHP 研究所／編
- 「逆ソクラテス」伊坂幸太郎／著
- 「金閣寺の燃やし方」酒井順子／著
- 「等伯」安部龍太郎／著
- 「長沢鼎」森孝晴／著
- 「日本製」三浦春馬／著
- 「岸田ビジョン」岸田文雄／著
- 「蝸ノ記」葉室麟／著
- 「三体」劉慈欣／著
- 「ツナグ」辻村深月／著
- 「パンと牛乳は今すぐやめなさい!」内山葉子／著
- 「鍵のかかった部屋」貴志祐介／著
- 「日没」桐野夏生／著
- 「テロリストの家」中山七里／著
- 「少年と犬」馳星周／著
- 「学校の「当たり前」をやめた。」工藤勇一／著
- 「図書室」岸政彦／著
- 「眠る盃」向田邦子／著
- 「満月珈琲店の星詠み」望月麻衣／著
- 「命の砦」五十嵐貴久／著
- 「居眠り磐音江戸双紙」佐伯泰英／著
- 「大人は泣かないと思っていた」寺地はるな／著
- 「乱反射」貫井徳郎／著
- 「ノボさん」伊集院静／著
- 「誰も「戦後」を覚えていない」鴨下信一／著
- 「アロハで猟師、はじめました」近藤康太郎／著
- 「希望の峰マカルー西壁」笹本稜平／著
- 「神とさざなみの密室」市川憂人／著
- 「夏の終わりに君が死ねば完璧だったから」斜線堂有紀／著
- 「司馬遼太郎が考えたこと」司馬遼太郎／著
- 「眩(くらら)」朝井まかて／著
- 「流人道中記」浅田次郎／著
- 「運命を拓く」中村天風／著
- 「八月十五日の空」秦郁彦／著
- 「道は開ける」D.カーネギー／著
- 「ナツカのおばけ事件簿」斉藤洋／作
- 「三島由紀夫と死んだ男」犬塚潔／著
- 「星の子」今村夏子／著
- 「電車で行こう!」豊田巧／作

……などの本をご応募いただきました。

紙面の関係で、お寄せいただいた感想や
書名のすべては掲載できませんでした。
ご協力いただきました皆様、
ありがとうございました！！



◆開館状況について◆

現在、図書館では感染症拡大防止のため、状況に応じて開館日時やサービスを変更しております。最新の開館情報については、図書館ホームページ等でご確認ください。

川口市立図書館 連絡先・開館時間

【中央図書館】

☎ 048(227)7611
住所: 川口市川口 1-1-1

平日
午前 10 時～午後 9 時

土・日・祝休日
午前 9 時～午後 6 時

【前川図書館】

☎ 048(268)1616
住所: 川口市前川 3-4-27

【戸塚図書館】
☎ 048(297)3098
住所: 川口市戸塚東 3-7-1

平日 午前 10 時～午後 6 時

【新郷図書館】

☎ 048(283)1265
住所: 川口市東本郷 1688

【鳩ヶ谷図書館】
☎ 048(283)3110
住所: 川口市坂下町 3-16-6

土・日・祝休日

【横曽根図書館】

☎ 048(256)1005
住所: 川口市仲町 10-16

※前川図書館は移転
のため、4月から
開館予定です。

平日 午前 9 時～午後 5 時

【芝園分室】

☎ 048(269)2241
住所: 川口市芝園町 3-17

平日
午後 1 時～午後 5 時

土・日・祝休日
午前 10 時～午後 5 時